ヴェブレンの人類学的知見に関するノート

石　田　教　子*

Ⅰ　はじめに

T. B. ヴェブレン（Thorstein Bunde Veblen, 1857-1929）は，19-20 世紀転換期に活躍したアメリカの経済学者であり，制度派経済学および進化論的経済学の最初期の理論家とされている．経済学の方法論上の「再建」という課題（Jorgensen 1999, 194）に専心した彼は，経済行動の説明モデルを刷新するために，人類学周辺の研究成果を参照する必要性を強調したことでもよく知られている[1]．本稿の目的は，彼の経済学方法論の論理構造を探る前段階として，主として伝記的事実や二次的資料に基づいて，その思想形成の社会的および歴史的背景を確認することにある．

この問題を考察することの意義を最初に述べておこう．ヴェブレンの経済学批判のロジックや，進化論的経済学という方法論上の枠組みを理解するためには，後述するとおり，当時の人類学周辺の研究成果を彼がどのように吸収したかという問題を解明しなければならない．だが，人類学からの影響は決して小さくないという認識自体には研究者間である程度のコンセンサスがあるにもかかわらず（Hamilton 1991; 佐藤 1999; Edgell 2001; Taka 2005; Tilman 2007），生物進化論からの影響を特に重視する Samuels（1990）や Hodgson（2001; 2002; 2008）などの考察と比べると，詳細にまでふみこんだ研究は少ないのが実情である．本稿は，そのような現状に鑑み，まずは彼が実際に読み，実際に関わった人類学周辺の諸思想のエッセンスを抜き出し，それらの諸論点を整理することを目指す．

本稿の構成は次のとおりである．最初に，第Ⅱ節では，当時ヴェブレンが所属したシカゴ大学の学術的状況も念頭におきつつ，19 世紀末の経済学史的背景を確認する．つづく各節では，彼が積極的に受容したと考えられる次の三つの学問領域を取り上げる．もっともこれらの領域区分はあくまでも現在の区分に従うものであり，当時の人類学的知見がこのように分類されていたことを示唆しているわけではないが[2]，三つの学問領域とは，順に文化人類学（第Ⅲ節），自然人類学（第Ⅳ節），心理学ないし動物行動学（第Ⅴ節）である．以上のような構成により，本稿は，従来研究において彼が最も強い影響を受けたとされてきた進化論が，人類学や心理学をも包含するより幅広い知識領域として認識されていたことを示す．

Ⅱ　19 世紀末における限界効用学派批判と『有

*　日本大学経済学部　ishida.noriko@nihon-u.ac.jp

1)　文献の参照については，著者，出版年（必要である場合，ページ数）を記して示す．なお，ヴェブレンからの参照は，書名の略語とページ数によって記す．

2)　この分類は，多岐に渡るヴェブレンの議論を大まかに類別することで，彼の思想形成に影響を与えたいくつかの知見の源泉を辿りやすくする目的で行ったにすぎない．当時の学問領域の境界は現在よりもずっと曖昧であった．例えば，第Ⅲ節の文化人類学の系譜において取り上げる F. ボアズの地理学的視点や考古学（初期人類史）は，第Ⅳ節で取り上げる自然人類学の領域から切り離して論じることはできない．また，本稿においては，問題の設定上別論扱いとしている生物学が，第Ⅴ節で取り上げる動物行動学を領域的に含有していることは後述するところである．

閑階級の理論』の執筆

19世紀後半以降，限界効用学派が正統派としての地歩を着々と固めるにつれて，一科学として自立しつつあった経済学は，その方法論上の道具としての数学を積極的に活用しはじめていった．だが，ヴェブレンはそうした動向を尻目に，限界効用学派のモデルでは現実の経済行動を理解するには不十分であると主張した．19世紀末に発表された有名な論文「経済学はなぜ進化論的科学ではないのか」（Veblen 1898, 以下「進化論的科学」）では，当時の正統派経済学が依拠する心理学的および人類学的前提がはなはだしく時代遅れであり，そこで描かれる人間はまるで快楽と苦痛の計算機のようだと揶揄されている．

> 経済学者の心理学的および文化人類学的前提観念は，数世代前に心理学や社会科学によって受け入れられていたものである．人間に関する快楽主義的な構想とは，快楽と苦痛の電光計算機というものであり，そこでは人は，その領域のまわりでは彼を動かすが，彼をそのままにしておく刺激の衝動によって，幸福という欲求を抱く同質の小球のように揺れ動く．彼は前例も知らなければ，その帰結も知らない．彼は，彼をあっちこっちの方向に置き換える衝撃力にもまれるとき以外は，安定した均衡のなかにいる孤立した，典型的な人間与件である．…衝撃の力が尽きるとき，彼は停止し，以前のように独立した欲望の小球になる．快楽主義的な人間は，精神上の原動力ではない．（PS: 73-74）

快楽主義的人間は，その経済理論において原動力とは見なされていないし，「生活のプロセスの中心」とも見なされていないとヴェブレンは言う（PS: 74）．確かに数学化の代償として，経済学における人間は極度に「斉一的，受動的および不変的」存在（PS: 134-35）として描かれていたから，計算機のような人間モデルでは人々の日常生活を反映できるはずはないという批判も成り立つだろう．進化論を拠り所にして経済学方法論の刷新を図ろうとした彼は，新たな知見に基づいて人間行動モデルを再構築しなければならないと語気鋭く迫った．そこには，いかにしてふつうの日常生活を事実に即して描き出すかという彼の課題があった[3]．

そして，上述の文章から分かるもう一つのことは，「新たな知見」の意味するところは心理学および人類学であったということである．ヴェブレンは，経済学が進化論をモデルに再建を果たす必要性を強く感じていたが，そのためには最新の人類学や心理学が提供する新たな人間観に学ばなければならないと考えていた．そのことが最も良く分かるのは，論文「進化論的科学」の冒頭において人類社会学者G. ヴァシェ・ド・ラプージュに言及している文脈であるが（第Ⅳ節において後述），親友サラ・ハーディ宛てに次のように書き送っている事実からもその熱意を読み取ることができる．日付は1896年1月23日である．Jorgensen（1999, 41）によれば，ヴェブレンが講師としてシカゴ大学に着任した1892年からの3年間，二人はコーン（Gustav Chon）の『国民経済学体系――金融経済体系』（1889）の翻訳に従事し，1895年3月にUniversity of Chicago Pressから『グスタフ・コーン：金融の科学』として英訳を出版したばかりだった．

> ……僕は，提唱したい一つの理論を心に抱いています．……僕の理論は，経済科学の発展の少し後の未来に関わっているのですが，僕がそうであると主張するほど，新しいものでも新奇なものでもありません．それは，あなたの属している世代の経済学者の仕事が（結局は，その研究が無視することはできないという限りで）実

3）ヴェブレンの進化論的経済学の機械論的方法論の核心にあるのは事実問題（matter of fact）を重視する科学者の精神習慣である（石田2014b）．

質的に近代的な系譜にあるこの科学の再建（rehabilitation）にあるべきだという主旨のものです．経済学は，近代的な進化論的科学の方向へ至るでしょう．そして，それはこれまでにそうなっていません．この再建への出発点，あるいは厳密にはその再建の基礎は，一般的な意味での経済理論にとって，おそらく最も直接的には，近代的な人類学や心理学の科学でしょう．そして，今ちょうどはっきりと形を顕わにしつつある民俗心理学でしょう．慣習，適性，性向および思考習慣から始めるとき（その多くがおおよそ利用可能な形で刊行されています），この科学は，一般的に考えて，経済的諸制度の進化に関する科学という形を取るでしょう．（Jorgensen 1999, 194）

このように，この手紙では，新しい経済学は「経済的諸制度の進化に関する科学」（a science of the evolution of economic institutions）と表現された．そして，その3年後に上梓された処女作『有閑階級の理論』（1899，TLC，以下『有閑』）のサブタイトルは，「制度の進化に関する経済学的研究」（An Economic Study in the Evolution of Institutions）と設定された．したがって，『有閑』が世紀転換期の経済学「再建」構想の実践例であることは間違いないだろう．

また，ドーフマンの伝記や同時期の書簡から分かるのは，彼が幼少時から他文化に大きな関心を抱いていたこと，最初の人類学への傾倒時期は博士論文の提出後シカゴ大学に就職するまでの30歳代の頃（1884-92）だろうということである．論文「進化論的科学」のスタンス同様，この頃には人類学が経済学方法論を革命的に変えるはずだという見通しを親友ハーディに生き生きと語り，自分の人類学の愛読書も熱心に勧めている．シカゴ大学の教え子達にも同じように接したようだが（Dorfman［1934］1972, 132／訳192），おそらくこの時期の没頭は，同大学の当時の学術的状況とも深く関わっている．

竹沢（2003, 454）によれば，アメリカで学問としての人類学の制度化が進むのは1880年代末である．時期的にみて，大学の学部の設置，専門機関，専門雑誌の整備などは経済学とほぼ同時進行で進んだと考えられる．シカゴ大学の経済学系雑誌 *Journal of Political Economy*（JPE，1892年創刊）の編集および書評執筆にヴェブレンが関わっていたことはよく知られているが，同大の社会学系雑誌 *American Journal of Sociology*（AJS，1895年創刊）には当時人類学に関する論文や翻訳が多数掲載されていた．彼自身も『有閑』の「理論的前提」とされる3編の論文――すなわち「製作本能と労働の厭わしさ」,「所有権の初期」および「野蛮時代の女性の身分」――をJPEではなくAJSに先行発表した事実を考慮すれば[4]，彼は確実にこうした分野の最新情報を見聞する機会に恵まれていたといえる．

以下では，ヴェブレンの経済思想の形成に寄与したと考えられる人類学に関わる三つの「新たな知見」について順次考察していこう．

Ⅲ　文化人類学の系譜

ヴェブレンに最も大きな影響を与えたのは文化や文明を対象とする人類学の系譜であろう．そして，その最初の世代は，言うまでもなく人類学を「文化科学」[5]と定義した人類学の父タイラーの世代である．この時代には，植民地政策の延長線上で観察された原住民と西洋人の異質性が――実際には，類似性も含めて――さまざまな仕方で記述された．それと同時に，最初は未開と文明という対照のもとで人間の文化の多様性が意識されるよ

4)　これらの3編の論文は，1898年から1899年にかけてAJSの第4巻に掲載された．この時期の『有閑』の執筆過程と，3編の論文の位置づけに関しては，高（1991）の第1章が詳しい．

5)　文化科学（The science of culture）は，Tylor（［1871］1891）が自身の方法論について解説している第1章のタイトルである．

うになった.

ヴェブレンの論稿においてもタイラーの影響は顕著である．例えば，『有閑』や科学史的論文にかなりの頻度で出現するアニミズムの概念は，ヴェブレンが確実にタイラーを読み込んだという事実，およびその文明史の方法を参考にした跡と見なすことができる．また，廃れた風習の再興を指す「残存」(survival) の概念（Tylor［1871］1891, 16／訳 4）や，生産技術の発達を軸にした進歩の論理などは，ダーウィン的な生物学由来というよりは，タイラーを始めとする初期の文化人類学によるところが大きいと言える[6]．Bowler（1990）が指摘するように，文化の進化を記述しようとする探究は生物進化論の結果生じたのではなく，同時代に独立に生じた知的動向であったと押さえるのが正確だろう.

ただし，この文化人類学の系譜は 20 世紀に差し掛かると大きな方法論的転換を経験する．F. ボアズに始まる新しい文化人類学の始動である．古い系譜と新しい系譜との最大の違いは，西欧中心主義的でない相対主義的世界観を意識的に受け入れているかどうかにある[7]．ヴェブレンは両方の系譜の成果を存分に吸収したと考えられるが，Jennings and Waller（1994）が指摘するように，後者に近い世界観を描き上げたというのが妥当である[8]．文明に野蛮を見いだし，未開に非好戦的繁栄の起源を読み込む彼の歴史観は，初期の西欧中心的な文明史観とは確実に一線を画す文化相対主義的な世界観に由来するものと見なせるからである.

そうした世界観をもたらしたとされる参与観察と現地語の使用からなるフィールドワークは，人類学史上一般に B. マリノフスキーによる発明とされているが，最近の研究によれば，1884 年にはすでにボアズが北米先住民社会を対象に行っていたことが分かっている（竹沢 2007, 74n）．I. W. トーマスなどの同僚達がタイラーの『原始文化』をテキストに採用しながらも，こうした新しい世界観を示しつつあったことは，ヴェブレンの人類学的知識を深めたに違いない[9]．また，ボアズ同様フィールドワークの手法によりメキシコの原住民文化を詳細に調査した同僚 F. スターとの関係も重要である．Dawson（1993, 496n）によれば，『有閑』の執筆時期と重なる 1893 年にはヴェブレンがスターの部屋を間借りした記録が残っている．スターの『メキシコ南部のインディアン――民族誌的アルバム』（Starr 1899）は『有閑』と同年の刊行であるが，写真資料を豊富に含むメキシコ原住民に関する研究成果であった．スターの家に住んでいた時に最初の人類学的経済理論である『有閑』が執筆されたことを考えれば，こうしたアメリカ発祥の新しい文化人類学の胎動をヴェブレンが身をもって体感したであろうことは疑いない.

また，1906 年にシカゴ大学を辞職しカリフォルニア大学に移ったものの，ヴェブレンは 1909 年には再び職を失う．こうした不遇を経験したにもかかわらず，彼は 1910 年には新しい研究計画を構想している（Dorfman 1933）．残念ながらこの課題が採択されることはなかったが，彼は「バルト海およびクレタ島の古文化に関する研究計画」という課題（Veblen 1910a; 1910b）をカー

6)　アニミズムの概念は『有閑』にも頻出するが，この著作ではヴェブレンは参照や引用の出典を丁寧に記載しなかったため，各々の出所は想像するしかない．タイラーのアニミズム概念に関しては，Stocking（1971）が詳しい．また，生産技術の議論は Tylor（［1871］1891）の第 1 章の最後に少し論じられているが，タイラーの中心的な関心は，周知のとおり，神話，哲学，宗教，言語，技術および慣習の進化にあった.

7)　ボアズの文化人類学の学史的位置づけについては，前野（2013），Stocking（1974）を参照.

8)　例えば，Smithsonian Institution の Bureau of Ethnology の 6th Annual Report である *The Central Eskimo*（Boas 1884-85）は，ヴェブレンによっても何度か引用されている文献である.

9)　テキストの採用に関しては Dawson（1993, 495），西欧中心的な進歩主義的進化観の批判と見なせるトーマスのスペンサー批判については Dorfman（［1934］1972, 125／訳 182）を参照.

ネギー研究所に応募している[10]．その目的は，「西洋文明に特徴的な自由な諸制度」を構成している諸要因を突き止めるために，「このケースにおいて独特である諸人種（あるいは，人種）の本性的素質と，西洋人が特にその初期にそのもとで暮らしてきた物質的（経済的）諸環境」とを調査することであった（ECO: 575）[11]．彼は計画書の冒頭で人類最古の農耕集落とされるアナウ遺跡と，その発見者 R. パンペリーに言及しており，このことは彼が最新の考古学動向に通じていたことを示している[12]．彼が実際に希望したのは，ヨーロッパ各地の遺跡巡り，イギリス，デンマークおよびスウェーデンなどの博物館訪問，関係する考古学者や民俗学者との学術的交流であったが，『有閑』執筆当時の人類学に対する熱は冷めるどころか，晩年においてもいっそう勢いを増していったことが分かる．また，研究とは別だが，晩年に出版された翻訳『ラックサー谷の人々のサーガ』（Veblen 1925）[13] も神話解釈という切り口からヨーロッパ人種の起源を思い巡らす試みと見なせるだろう．

ボアズやパンペリーの研究を引きながら，ヴェブレンが述べようとしたことはいたって簡明である．ヨーロッパ文明の最初期は平和愛好的文化であり，好戦的ないし略奪的文化ではなかったという歴史解釈[14]，これである．ボアズの中央エスキモー研究やパンペリーのアナウ遺跡の発掘調査の成果は，彼にとってその恰好の例証であった．

> 文化の起源と初期人類史に関する近代の研究では，最近まで無批判に次のように仮定するのが常であった．すなわち，人間社会は，人類の発生以来，相互的な敵意のもつれて解けない網の中に絡ませられ，全面的な恐怖感に苛まれてきたという想定，「自然状態」は万人の悪事と疑念という形で表される血を流し傷つけ合う状態であったという想定である．原始文化の研究者，さらに特に初めてフィールドワークに従事して，低級文化の人々と接触するようになった人々は，最近になって，諸事実はそういう想定をまったく支持しないと実感するようになってきた．彼らによれば，未発達な技術的装備に助けられて自らの暮らしを立てねばならない社会は，彼らの隣人を害することに習慣的に忙殺されるような余裕は持ちえない．特に，侵略を価値あることとするような運搬可能な富を，その隣人がまだ蓄積していなかった限りはそうなの

10）『帝政ドイツと産業革命』（1915, IG）には補注ノートが 5 本収録されているが，そのうちの第二ノートがバルト海の古文化に関する論稿であった．この点に関しては，佐藤（2000）を参照．

11）この「研究計画」は結局不採択となったが，“The Mutation Theory, the Blond Race, and the Aryan Culture”というタイトルで執筆された論文がカーネギー研究所に提出された（未刊）．Veblen（1913a; 1913b）はその修正版と推測されている．また，後にその一部が『製作本能』にも組み入れられた．

12）パンペリーは，1903-05 年にカーネギー財団の資金によってトルキスタン探険を指揮し，イラン国境に近い南トルクメニスタンのアナウの遺跡を調査し，この地を最古の農耕文化と位置づけた．5 つあるうちの最古の層（アナウ文化Ｉ）の時期は，およそ紀元前 6000-8000 年ごろと見積もられた（Champlin 1994, 189-190）．ただし，現代では農耕の開始時期に関しては諸説があり，確定解釈があるわけではない．パンペリーのアナウ調査の成果は 1908 年『トルキスタン探検：1904 年の調査旅行――アナウの先史文明，その起源，発展および環境の影響――』（Pumpelly 1908）として出版されたが，これがヴェブレンの参照元である．ここでは，小麦の栽培を示す器物や美しくデザインされた陶器などが発掘された．

13）サーガ（saga）は物語の意味で，口承を記録した北欧中世の伝説的叙事詩のことを指す．

14）もっとも，こうしたヴェブレンの先史時代解釈には明確な裏付けはない．したがって，Pluta（2012）の主張によれば，最新の考古学における先史時代研究の成果から見た場合，ヴェブレンの平和愛好的な未開時代の想定，およびヴェブレン－エアーズ型の技術と制度のダイコトミーは証拠不十分であるばかりか，寓話（myth）にすぎない．他方で，他の霊長類現存種との比較を重視する山極（2014）のサーベイに依拠する限り，人間の生活史戦略の変容からすれば，700 万年にわたる人類の進化史のなかで，つねに武器を用いた戦いが顕著に行われていたわけではないとする諸説もある．ただし，その分岐点はおよそ 1 万年前であるという．

である．（IW: 123／訳102）

トランスカスピアのアナウで，パンペリーによって発見された後期新石器時代ないし「銅石器時代」の文化は，一方における工芸技術と他方における耕作と家畜飼育の技術の発展の同時性を，きわめてはっきりと示している．……アナウにおける工芸技術の最も特徴的な特色は，おそらく埋蔵物のより初期の半分に武器がまったく存在しないことである．（IW: 70n／訳85）

ここで注意しなければならないのは，ヨーロッパ文明の最初期は平和愛好的であったと主張することによって，彼が真に伝えようとしたことである．それは，産業技術の発展とともに私的所有制度が出現し，すなわち富の蓄積が進展するにつれて，ヨーロッパにおいて平和愛好的な文化が影を潜めるようになってしまったという歴史解釈である．所有権制度が確立することにより，準平和的経済組織（quasi-peaceable economic system）へと移行するというリバイバルのプロセスも描かれてはいるが（IW: 187／訳157），いずれにせよ，輝かしき文明の背後にあって語られることの少なかった，人類の負の側面――人間性に内在する「利己的性向ないし感情，おそらく特に人間の弱さ」（IW: 190／訳159）――も，その文明史のなかに，そして，経済行動モデルのなかに組み込まなければならないというのが彼の意図であったと考えられる．

Ⅳ　自然人類学の系譜

これまでに最も大きな影響を与えた源泉として文化人類学を見てきたが，実は，影響の順序で言えば，今日自然人類学に属す知見の方が先であった．

ヴェブレンが最初に読んだ人類学文献は1870-80年代のフランスの医学ないし頭蓋計測学関連文献であった．当時ヴェブレンが親友や学生に強く勧めたのは，こうした系譜に属すガブリエル・ド・モルティエやピエール・トピナールの著作であった．友人ハーディに宛てた手紙（1896年2月6日付）における告白によれば，彼の最初の人類学読書は前者の『有史以前』（1882）と後者の『人類学』（1876）である（Jorgensen 1999, 197）．いうまでもなく，今日では，そもそも人種という概念自体に疑いがもたれており（American Anthropological Association 1998），頭蓋計測学の成果のうち人種の優劣に言及する科学的立論も稀であるが，当時の思想史的文脈では，自然科学者のみならず社会科学者にとっても，いずれも必携の常識的知識であった．

最初は肌の色や顔つき，後に骨の形や頭の大きさによって，すなわち数量的ないし統計的――ある意味では「科学的に」――人種を区別する試みが開始された．19-20世紀転換期には，その試みは優生学や隣接する社会科学的成果へと継承されていった．G. ヴァシェ・ド・ラプージュもそうした系譜に並ぶ人物であり，彼は「社会発展という問題の解決策に人類学を応用することはより著しい成果を約束する」という信念から，「社会的制御の技術」を用いた「社会的選択」（sélection sociales）を提案した（Vacher de Lapouge 1897, 54）．ヴェブレンは，「人類学は，細菌学が医学に革命をもたらしたのと同じぐらい徹底的に，政治科学や社会科学に革命をもたらす運命にある」（PS: 56）という彼の一文を，論文「進化論的科学」の冒頭で好意的に引用している．とはいえ，婚姻によらない優秀な人間の人工的繁殖計画を含むヴァシェ・ド・ラプージュの提案はあまりにもグロテスクであり，現代的感覚からすれば「応用人類遺伝学の似非科学的失敗部門」（Schneider 1990, 69／訳151）と決めつけてしまいたくなるが，当時のシカゴ大学には同僚C. クロッソンを初めとして信奉者が存在した．もっともこうした文脈を理解する場合，当時の優生思想自体が一般に相対すると考えられがちな20世紀的福祉国家思想と共鳴する側面を持ち合わせていた事実も忘

れてはならない[15]．

ヴェブレンもまた骨相による人間の区別を受け入れた一人であることは確かであるが，基本的にその区分はコーカソイド内の区分であった．彼によれば，いわゆる「白人」あるいは「カフカス語族」（a “white” or “caucasic” race）（IW: 119／訳 100）は三つの種族――すなわち，地中海人種（the Mediterranean），アルプス山岳人種（the Alpine）および北方人種（the Northern）――に分類される．そして，この人種区分は，順に長頭ブルネット（dolichocephalic-brunet），短頭ブルネット（brachycephalic-brunet），および長頭ブロンド（dolichocephalic-blond）という骨相による人種の三区分に対応している[16]．ここでヴェブレンが強調するのは，最後の長頭ブロンドの北方人種の優秀性であったが，その優秀さの意味は平和愛好的ではなく，略奪的な気質をより多く保持していることを指していた[17]．その点で，アナウやエスキモーの文化を重視する彼にとって，この文脈における「優秀性」は一種のアイロニカルな整理であり，物質的な社会福祉の向上という彼の経済学の基準からしても，必ずしもポジティブな意味だけを含むわけではなかったことを読み落とすわけにはいかない．

それと同時に，このような人種の分類をそこに属す人々の気質と結びつけるヴェブレンの方法から分かるのは，彼の文明史における歴史進化の導因であり，人間本性論のコアでもある本能の概念――人間行為の略奪性や平和愛好性等の原動力と想定されている――が，こうした古い自然人類学の系譜を一つの源泉としているということである．

ただ，こうした彼の人種論は肉体的な区別を指してはいたが，それ以上に力点がおかれていたのは精神的な区別であった．さらに言えば，彼の語った「遺伝」は個体間のそれではなく，集団における文化的な遺伝を指していたのであり，彼によれば，「人類のどの人種の遺伝も，つねにあらゆる個人を人類として分類するのに十分同質的である」（IW: 140／訳 119）ことに疑いはない．その意味では，彼が論じた人種は文化的な区分であり，人類に属す個々人はいずれも同じ複数の本能的気質を共有する混血，すなわちハイブリッドだったのである．

こうした人種論の視点は，彼の最期の執筆論文（未発表）においても姿を消すことはなかった．だが，「優生学実験」（Veblen 1927?）と題されたこの小論は考古学的ないし経済史的考察であったが，北欧地方の出移民の多さについての歴史的考察であった．つまり，「実験」とは名ばかりで，それは，ヴァシェ・ド・ラプージュが提案したような現実に実行を想定した計画ではなかった．

15）この点に関しては，例えば米本ほか（2000），Schneider（1990），Gould（1996）を参照．

16）セファリックは頭蓋の形を指し，ブルネットおよびブロンドは頭髪の色を指している．この人種区分は『有閑』以来のものであり，佐藤（1999, 201）によれば，アメリカ人人類学者 W. Z. リプレーらの分類に由来しているが，『製作本能』では，ヨーロッパの人種区分に関する先行研究として他にも次の 4 点を挙げている．以下に列挙しておくと，イタリア人人類学者 G. セルジの『地中海人種』（*The Mediterranean Race: A Study of the Origin of European Peoples,* 1901），ヴァシェ・ド・ラプージュの『アーリア人』（*L'Aryen: son rôle social,* 1899），J. ドゥニケールの論文「ヨーロッパの諸人種」（*Les races européennes, Bulletins de la Société d' Anthropologie de Paris,* Ser. 4, 8, 1897）および「ヨーロッパ人を構成する 6 人種」（Les six races composant la population de L'Europe, *Journal of Anthropological Institute,* vol. 34, 1904）である．なお，注意を要するのは，この時代に多くの研究者がその起源を追い求め熱中した「アーリア人」には，ナチズム以後に広まったレイシスト的な意味合いがまだ含まれていないことである（Champlin 1994, 164）．

17）長頭ブロンドの優秀性および略奪性に関する言明は，例えば，『有閑』の第 9 章「古代的特質の保存」や『製作本能』の第 3 章「産業技術の未開状態」の文脈を参照．加えて，このヨーロッパの三人種のうちでも，長頭ブロンドは最も若い種族と位置づけられている（IW: 122／訳 101）．

V　社会心理学ないし動物行動学の系譜

すでに触れたように，ヴェブレンは，『有閑』の構想をほぼ固めた1896年の始めに友人ハーディに何度か手紙を書いている．既存の経済学が基礎とする心理学は時代遅れであるという彼の主張が19世紀後半の経済学方法論争の動向を強く意識した発言であったことは，次の文脈から最も良く読み取ることができる[18]．

> これ［経済学が進化論的科学に向かいつつある動向――引用者］は，歴史学派と呼ばれる動向が意味するものだったとも言われるかもしれません．ですが，歴史家たちは，彼らの使命を認識できずにバカげたことの中に逃げ込んだのです．他方で，オーストリアンと他の国々にいる彼らの支持者たちは，本能的かつ向こう見ずに心理学の領域に手探りで進んでいき，そこに彼らの諸理論の諸前提や正当化を見いだそうとしてきたのですが，彼らは目指そうとすることが分からなかったうえにその心理学に関しては時代遅れだったために，その成果は，そうでなければ有したはずの価値をもたなかったのです．しかしながら，それ以外のことが違うとしてもこれだけは的を射ているというのは，この科学の発展がいずれの方向に進もうとも，人類学の概略を扱う何冊かの著作を読むことが誤りだということは決してないということです．（Jorgensen 1999, 194-195）

ここで注目したいのは，人類学が重要だという主旨が繰り返される一方で，同時に主張されているのは，新しい心理学に学ぶべきだということであった．彼は，このように，行為に関する心理学や（それと隣接する）動物行動学の系譜も同じく「新たな知見」の一部をなすものと認識していた．自然人類学の系譜から吸収した諸成果がその独特な本能論と結びつけられていたことを考えれば，本稿において，心理学や動物行動学の系譜を人類学的知見の一源泉として扱うことは必ずしも見当違いとは言えないだろう．

1896年の2月6日の手紙では，ヴェブレンは次のように書き送っている．

> 僕が君を騙して誘い込もうとしている人類学の読書に関しては，それが直接に大変役立つかどうかは分かりませんが，人類について知るという意味である程度は役に立つはずです．人類学者によって考察されるような人間が，僕たちが日常生活や商業的な生活において見ている人間よりも人間らしいというわけではありません――おそらく彼はそれほど人間らしくないでしょう．しかし，人類学的な調査は，人間についての釣り合いのとれた見方，古典派経済学者たちによってふつうに解釈されているよりも広い見方を与えるはずですから，「経済人」という概念に寛容さと真面目さを与えるはずです．（Jorgensen 1999, 196-197）

「経済人」に「寛容さ」と「真面目さ」を付加するために，ヴェブレンが探し求めた心理学上の諸成果は，『製作本能』の脚注にリストアップされている．それらを見る限り，彼が人間の心理学的基礎を再考するために，隣接する生物学，特に動物行動学周辺の成果をふんだんに吸収していることは明らかである．Taka（2005）も注意を促しているように，動物行動学とヴェブレンの人間本性論の視角の相似は決して無視できるものではない．

例えば，ヴェブレンの心理学的議論にはM. パーマリーやJ. ローブの向性論やW. マクドゥーガル，C. ダーウィンおよびG. J. ロマネスらの本能論の影響が見られる．

向性（tropism）は一般に屈性とも言いかえられ，

18）Letter from Veblen to Sara Hardy, January 23, 1896.

例えば，植物が太陽（刺激源）の方向に曲がるような現象を指す．したがって，それは動物の生理的反応よりもずっと単純な反応を指すものと考えられる．この当時の学術動向について補足すると，パーマリーのように，本能の概念を用いるのではなく向性の概念により，動物の行動を説明する者も少なくなかった一方で，ロマネスのように，動物や植物の作用に目的や熟慮を読み取ろうとする研究者も見られた（Romanes［1883］2011; 1892）．しかし，どちらの立場も極端だというのがヴェブレンの解釈であり（IW: 28n, 75／訳 32n, 61），いずれの理論についても盲信している様子は見られない．

また，同時代の本能論者としては，W. マクドゥーガルという大人物がいる．ヴェブレンは1908年初版の*An Introduction to Social Psychology*（McDougall 1909）を参照している．誕生間もない社会心理学というこの新しい学問領域に，彼が強い影響を受けたことは確かであろう．限界効用学派の快楽主義的人間像をそれぞれが孤立した計算機のようだと批判し，社会的存在として生きる現実の人間の心理を描きだそうというのが彼の目標であったからである．だが，本能概念の分類や感情の発展と結びつける説明論理を見る限り，両者は同じではない[19]．むしろ，ヴェブレンは文化人類学のデータを参考にしながら，さまざまな人間の本能や性向を自ら抽出するとともに，習慣という概念を組み合わせながら，かなり自由に人間本性について論じているように見えるからである．

そして，習慣の概念に関しては，生物学との次のような関係も指摘しておかなければならないだろう[20]．ヴェブレンは，人類学に傾倒した1890年代以降は，人間の行為を説明する上で本能と習慣という二つの概念を重視したが[21]，この二つの概念に関しては，ダーウィンとの間接的関係も浮かび上がってくる．ヴェブレンは，かつて生物学において本能の概念が大流行していたという学史的事実を把握していた（IW: 1-2／訳 4）．他方で，最新の動向としては，生理学的な説明があまりに重視されるようになり，本能の概念は注意深く回避されつつあったという事実も押さえていた（IW: 4／訳 5）．その上で，彼は，社会科学が対象とする人間行為の説明においては，むしろ「使い古しの」本能の概念こそが適していると考え，次のように述べたのである．

> 諸制度の発生論的研究が専心するのは，物質的環境によって，また人間本性の内在的かつ永続的な諸性向によって条件づけられる習慣や慣例の発展である．そして，これらの諸性向は文化的発展の行き来において効力を生じるのであり，それらの諸性向にとっては，使い古しの「本能」ほどすぐれた呼称はない．（IW: 2-3／訳 4）

本能の概念が大流行した時代の生物学者にダーウィンが入るかどうかは，この文脈からは判然とはしない．だが，生物学を含めた思想史と彼の思想形成期とを重ね合わせてみれば，その可能性は高いだろう．

『種の起源』は，周知のとおり，進化のメカニズムについて論じた書であるが，そこでは今日の動物行動学に準ずるような議論も展開されている．例えば，「本能」と題された第7章において，

19）　例えば，マクドゥーガルの『社会心理学入門』では，習慣（habit）の概念は，最終章において模倣（imitation）や遊び（play）とともにほんの僅かに論じられているにすぎない．それに対して，ヴェブレンの議論においては，本能論を軸としながらも，思考や行為を導くとされた習慣の役割はずっと大きい．

20）　生物学の文脈では，人間以外の動物の habit は「習性」と訳すのが一般的であるが，本稿では読みやすさを考慮し，どちらの文脈でも「習慣」を用いた．

21）　ヴェブレンの最初期の研究テーマであるカント哲学をめぐる議論においては，本能や習慣の概念は出現しない．例えば，Veblen（1884）では，人間の認識能力の一つである判断力と，それを基礎とした帰納的推論力が主題とされた（石田 2014a）．

ダーウィンはフレデリック・キュビエの議論を引きながら，本能と習慣が厳密には区別できないことに注意を促している（Darwin［1859］1993, 318／訳（上）270）．ある種の生物に内在する本能はそれに対応する行為を繰り返すように導くが，その行為が繰り返されれば，それは一種の習慣のようにも見えるからである[22]．これはヴェブレンにおいても同じで，本能という概念が特別に重視されているように見えて，実際にその文明史を記述する段になって彼が跡づけたのは思考習慣ないし精神習慣の進化であった．両者は概念的に区別されてはいるが，同じカテゴリーに属す概念と位置づけられたのである[23]．

また，ダーウィンの考察において，その本能の概念が人間の社会性や知性を内包している点にも注目すべきだろう．マクドゥーガルを待つまでもなく，ダーウィンは，ある種の本能に備わる社会性に着目し，そこに人間の知性の原型を見ていたからである．例えば，ダーウィンは同じ「本能」について論じた章において，カッコウが他の鳥の巣に産卵する本能，ある種のアリが奴隷を作る本能，ミツバチの巣作りの能力を検討しているが，こうした他の個体と協力する行動――厳密には協力しているように見える行動――は最も原始的な形式の社会性の発現と見なせるだろう．そして，『人間の由来』（Darwin［1871］1981）の議論に目を向けるなら，人間の社会性，そして知性の源泉を跡づけるダーウィンの議論の一つの水脈がスミスやヒュームの人間本性論にあることが判明する．そして，ヴェブレンにとっても人間の本能は知的な性向であるとともに，人間本性の社会性を説明するための概念装置であった．このように，生物学と社会科学の合流の跡を見ることができるのは興味深い．というのは，『人間の由来』からおよそ30年を経て再び経済学に生物学の科学方法論を取り入れようとしたヴェブレンの経済学「再建」構想は，ある意味ではその逆輸入を企図したものと見なせるからである[24]．

以上の考察から指摘しうるのは，ヴェブレンの本能概念のルーツは，骨相学や頭蓋計測学などの自然人類学経由の知見だけではなかったということである．そこでは，生物学とそこに隣接する動物行動学や社会心理学の研究成果も存分にふまえられていたからである．

Ⅵ　おわりに

ヴェブレンは，1898年に「経済学はなぜ進化論的科学ではないのか」と問い，既存の経済学がダーウィン以前の科学方法論にとどまっている点を厳しく批判した．したがって，ヴェブレン研究――特にその経済学方法論の論理構造を解き明かそうとする――は，何よりもまず進化論や生物学の方法論との比較検討を中心問題に定める傾向が強かった．だが，Tilman（2007, 298）が指摘するように，限界効用学派に象徴される同時代の経済思想と比較した場合，ヴェブレンの経済思想が驚くほど浮き立って見えるのは，いうまでもなく

22）この点に関しては，マクドゥーガルの解釈も近い．例えば，『社会心理学入門』第2章「諸本能の性質と人間精神の構成におけるその位置」において，快楽主義心理学と自身の本能心理学とを比較する文脈（McDougall 1909, 43）などを参照．

23）Veblen（1899-1900）によれば，習慣（habits），性向（propensities），適性（aptitudes）および慣例（conventions）は，いずれも同じ目的論的な範疇に属す（PS: 179）．ヴェブレンの独特な目的論の概念については，拙稿石田（2012）を参照．

24）引用や参照の事実からは，ヴェブレンが『人間の由来』（Darwin［1871］1981）を読み，自身の人間本性論に取り込んだかどうかは定かではないが，『営利企業の理論』（TBE: 370／訳293）には，次のような言及を見いだすことができる．「したがって，ダーウィンは，神ないし人間の導きの力に頼ることなく，また究極的には人間はどこから来たのか，あるいは，究極的にはどのような運命が人間に降りかかるのか，というようなことに関しては問いただすことなく，人間の由来（the descent of man）に関する暫定的な説明を行った．」なお，彼のワシントン・アイランドの別荘の蔵書には『人間の由来』が含まれていることが分かっている（Edgell 2001）．

人類学の膨大なデータや文献に基づいて経済行動が説明されていることによっている．そうであるとすれば，ヴェブレンに対する生物科学の影響は限定的であったと言うJennings and Waller（1998）の指摘は正しいのであり，ダーウィン以外の，生物学以外の，あるいは，そこに隣接する知見がいかに彼の進化論的経済学の構想を下支えしていたのかという問題が当然に浮かび上がってくるはずである．本稿の問題関心もここから出発している．

これまでの考察から，本稿がこの問題に対して指摘できることは次の三点である．

第一に，ヴェブレンにとって新しい経済学方法論の採用は，生物進化論のみならず，今日文化人類学および自然人類学，さらには心理学および動物行動学と分類されているような学問領域からの成果を吸収して初めて成し遂げられるものであったということである．進化論という知的動向はそれくらい奥深い拡がりをもっており，決して一枚岩ではなかった．そして，第二の論点として指摘できるのは，文化人類学の系譜がヴェブレンに歴史の動態性とともに，その相対性を意識させたとすれば，自然人類学や心理学ないし動物行動学の系譜は，人間という動物ならではの能動性や社会性に着目させたということである．第三に，ヴェブレンは上記のような隣接諸科学の成果をまるごと模倣して満足するような思想家ではなかった．借りてくるのは，あくまでもデータやアイディアであり，それを経済学方法論に役立つ仕方に再構成する作業はつねに彼のオリジナルであったということである．

当時の人類学が経済学を始めとする社会諸科学と非常に密接に関わっていたことは明らかである．経済学と社会学のみならず，生物学，医学ないし生理学と人類学，そして社会諸科学についても，それらの学問間の境界は今日ほど明確ではなく，互いの研究領域は重なり合っていた．例えば，骨相学ないし頭蓋計測学を専攻する医学者たちの研究成果を下敷きにして，社会および経済問題の解決に取り組もうとする社会科学者は少なくなかった．他方で，人類史の考察は考古学的ないし地理学的研究を前提とし，歴史を俯瞰するのみならず，例えば，Boas（1887; 1896）のジレンマに見られるとおり，人間の普遍性とは何かという根本的問題を再考しようとする側面も有していたのであり，主題は同時代の生理学や心理学の諸家と広く共有されていたはずである．したがって，ヴェブレンの経済学方法論を再評価する上でも，このような諸学問の学際的関連を念頭におく必要がある．すなわち，彼が進化論を経済学方法論のモデルとして採用したという場合，その進化論の内実そのものが多様な領域の議論を含んでいたことを看過すべきではないのである．

謝辞

本研究はJSPS科研費JP16K03580の助成を受けたものである．

参考文献

American Anthropological Association 1998. Statement on “Race.” May 17, 1998. American Anthropological Association 2015/8/10 <http://www.aaanet.org/stmts/racepp.htm>.

Boas, Franz 1884-85. *The Central Eskimo*. Smithsonian Institution, Bureau of Ethnology, 6th Annual Report.

————1887. The Study of Geography. *Science* 9: 137-141. 前野佳彦監訳『北米インディアンの神話文化』中央公論新社 : 10-22.

————1896. The Limitations of the Comparative Method of Anthropology. *Science, New Series* 4（103）: 901-908. 前野佳彦監訳『北米インディアンの神話文化』中央公論新社 : 42-57.

ボアズ フランツ 2013. 『北米インディアンの神話文化』，前野佳彦監訳，中央公論新社.

Bowler, Peter J. 1990. *Charles Darwin: The Man and His Influence*. Cambridge: Cambridge University Press. 横山輝彦訳『チャールズ・ダーウィン――生涯・学説・その影響――』朝日新聞社 , 1998.

Champlin, Peggy 1994. *Raphael Pumpelly: Gentleman Geologist of the Gilded Age*. Tuscaloosa and London: The University of Alabama Press.

Darwin, Charles［1859］1993. *The Origin of Species by Means of Natural Selection or the Preservation of Favored Races in the Struggle for Life*. New York: The Modern Library. 八杉龍一訳『種の起源』全2巻，岩波文庫，1990.

————［1871］1981. *The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex*. Princeton, New Jersey: Princeton University Press. 長谷川眞理子訳『人間の進化と性淘汰』全2巻，文一総合出版，1999-2000.

Dawson, Hugh J. 1993. E. B. Tylor's Theory of Survivals and Veblen's Social Criticism. *Journal of the History of Ideas* 54（3）: 489-504.

Dorfman, Joseph［1934］1972. *Thorstein Veblen and His America with New Appendices*. New York: Augustus M. Kelley. 八木甫訳『ヴェブレン――その人と時代――』ホルト・サウンダース・ジャパン，1985.

————1933. An Unpublished Project of Thorstein Veblen for an Ethnological Inquiry. *American Journal of Sociology* 39（2）: 237-241.

Edgell, Stephen 2001. *Veblen in Perspective: His Life and Thought*. Armonk, New York: M. E. Sharpe.

Gould, Stephen Jay 1996. *The Mismeasure of Man*. W. W. Norton & Company. 鈴木善次，森脇靖子訳『人間の測りまちがい』（増補改訂版），河出書房新社，1998.

Hamilton, David 1991. The Meaning of Anthropology for Economic Science: A Case for Institutional Reciprocity. *Journal of Economic Issues* 25（4）: 937-949.

Hodgson, Geoffrey M. 2001. Darwin, Veblen and the Problem of Causality in Economics. *History and Philosophy of the Life Science* 23: 383-423.

————2002. Darwinism in Economics: From Analogy to Ontology. *Journal of Evolutionary Economics* 12（2）: 259-81.

————2008. How Veblen Generalized Darwinism. *Journal of Economic Issues* 42（2）: 399-405.

石田教子 2012.「ヴェブレンの進化論的経済学における目的論の位置」『経済学論纂』52（3）: 111-140.

————2014a.「若きヴェブレンのカント『判断力批判』研究――進化論的経済学のルーツをたどる――」『経済集志』84（2）: 43-67.

————2014b.「ヴェブレンの進化論的経済学における機械論の位置」『経済集志』84（3）: 45-62.

Jennings, Ann and William Waller 1994. Evolutionary Economics and Cultural Hermeneutics: Veblen, Cultural Relativism, and Blind Drift. *Journal of Economic Issues* 28（4）: 997-1030.

————1998. The Place of Biological Science in Veblen's Economics. *History of Political Economy* 30（2）: 189-217.

Jorgensen, Elizabeth and Henry（1998）. *Thorstein Veblen: Victorian Firebrand*. Routledge.

前野佳彦 2013.「解説 フランツ・ボアズのコスモス理念――地理学から人類学へ」フランツ・ボアズ『北米インディアンの神話文化』所収，中央公論新社，2013: 373-409.

McDougall, William 1909. *An Introduction to Social Psychology*. Second Edition. London: Methuen & Co.

Pluta, Joseph E. 2012. Technology vs. Institutions in Prehistory. *Journal of Economic Issues* 46（1）: 209-226.

Pumpelly, Raphael 1908. *Explorations in Turkestan: Expedition of 1904. Prehistoric Civilizations of Anau. Origins, Growth and Influence of Environment*. Carnegie Institution.

Romanes, George John［1883］2011. *Mental Evolution in Animals with a Posthumous Essay on Instinct by Charles Darwin*. Cambridge: Cambridge University Press.

————1892. *Animal Intelligence*. Fifth edition. London: Kegan Paul, Trench, Trübner, & Co. Ltd.

Samuels, Warren J. 1990. The Self-referentiability of Thorstein Veblen's Theory of the Preconceptions of Economic Science. *Journal of Economic Issues* 24（3）: 695-718.

佐藤光宣 1999.「ソースタイン・ヴェブレンのヨーロッパ人種についての知見」『帝京大学文学部紀要（教育学）』24: 197-221.

————2000.「初期バルト海文化と北ヨーロッパ諸民族の産業技術の状態――ソースタイン・ヴェブレンの所説をめぐって――」『帝京史学』15: 85-113.

Schneider, William H. 1990. The Eugenics Movement in France 1890-1940. In *The Wellborn Science: Eugenics in Germany, France, Brazil, and Russia*. Edited by Mark B. Adams. New York: Oxford University Press. 佐藤雅彦訳『比較『優生学』史：独・仏・伯・露における『良き血筋を作る術』の展開』現代書館，1998.

Starr, Frederick 1899. *The Indians of Southern Mexico: An Ethnographic Album*. Chicago: Lakeside Press.

Stocking, George W. 1971. Animism in Theory and Practice: E. B. Tylor's Unpublished 'Note on "Spiritualism"'. *Man, New Series* 6 (1): 88-104.

————1974. *A Franz Boas Reader: The Shaping of American Anthropology, 1883-1911*. University of Chicago Press.

高哲男 1991.『ヴェブレン研究――進化論的経済学の世界――』ミネルヴァ書房.

Taka, Tetsuo 2005. Veblen's Theory of Evolution and the Instinct of Workmanship: An Ethological and Biological Reinterpretation. *The History of Economic Thought* 47 (2): 32-44.

竹沢素子 2003.「アメリカ人類学に見る進化論と人種」『変異するダーウィニズム――進化論と社会――』坂上孝編，京都大学学術出版会：452-489.

竹沢尚一郎 2007.『人類学的思考の歴史』世界思想社.

Tilman, Rick 2007. *Thorstein Veblen and the Enrichment of Evolutionary Naturalism*. Columbia, Missouri: University of Missouri Press.

Tylor, Edward B.［1871］1891. *Primitive Culture: Researches into the Development of Mythology, Philosophy, Religion, Language, Art, and Custom*. 2 Vols. London: John Murray. 比屋根安定訳『原始文化――神話・哲学・宗教・言語・芸能・風習に関する研究――』誠信書房，1962.

Vacher De Lapouge, Georges 1897. The Fundamental Laws of Anthropo-sociology. Translated by Carlos C. Closson. *Journal of Political Economy* 6 (1): 54-92.

Veblen, Thorstein 1884. Kant's Critique of Judgment. *The Journal of Speculative Philosophy* 18. Reprinted in ECO: 175-93.

————1898. Why is Economics Not an Evolutionary Science. *Quarterly Journal of Economics* 12 (4). Reprinted in PS: 56-81.

————1899. *The Theory of the Leisure Class: An Economic Study in the Evolution of Institutions* (TLC). New York: Macmillan Company. 高哲男訳『有閑階級の理論――制度の進化に関する経済学的研究――』（増補新訂版），講談社，2015.

————1899-1900. The Preconceptions of Economic Science, Part I-III. *Quarterly Journal of Economics* 13 (2); 13 (4); 14 (2). Reprinted in PS: 82-113; 114-47; 148-79.

————1904. *The Theory of Business Enterprise* (TBE). New York: Charles Scribner's sons. 小原敬士訳『企業の理論』勁草書房，1965.

————1910a. As to a Proposed Inquiry into Baltic and Cretan Antiquities. Published by Dorfman (1933). Reprinted in ECO: 575-580.

————1910b. Expense and Time Required for Executing Project. Published in ECO: 580-582.

————1913a. The Mutation Theory and the Blond Race. *The Journal of Race Development* 3 (4): 491-507. Reprinted in PS: 457-76.

————1913b. The Blond Race and the Aryan Culture. U*niversity of Missouri Bulletin,* Science Series 2 (3): 39-57. Reprinted in PS: 477-96.

————1914. *The Instinct of Workmanship and the State of the Industrial Arts* (IW). New York: The Macmillan Company. 松尾博訳『ヴェブレン 経済的文明論――職人技本能と産業技術の発展――』ミネルヴァ書房，1997.

————1915. *Imperial Germany and the Industrial Revolution* (IG). New York: The Macmillan Company.

————1919. *The Place of Science in Modern Civilisation and Other Essays* (PS). New York: B. W. Huebsch.

————1927? An Expriment in Eugenics. Published in ECO: 232-242.

————1934. *Essays in Our Changing Order* (ECO). Edited by Leon Ardzrooni. New York: The Viking Press.

山極寿一 2014.「人間性の起源を探求する重要性」*Anthropological Science (Japanese Series)* 122 (1): 76-

81.
米本昌平，松原洋子，橳島次郎，市野川容孝 2000.『優生学と人間社会――生命科学の世紀はどこへ向かうのか――』講談社.